村上の歴代藩主概略史

中世城下町から近世城下町へ	関ヶ原の戦いの後、徳川家康は秀吉恩顧やその系列の大名の取り潰しを図った。村上氏もその例外ではなく、家臣間の争いを理由に、徳川幕府によって廃絶となった。
中世城郭とは （村上要害） 近世城郭とは 豊臣秀吉 　刀狩り 　太閤検地 上杉景勝 外様大名とは 譜代大名とは	村上は、城下町を基盤として発展してきた城下町都市ですが、その発展の形は、村上城跡のあるお城山を扇の要として西に広がってきたといえます。その村上が、中世的な城下町から近世城下町へと生まれ変わるのは、１５９３年、今から３１８年前にさかのぼります。 上杉氏が、豊臣秀吉によって国替えを命じられ会津に移ると、あらたに越前から堀氏が春日山に移され、村上には、その越後の領主となった堀秀治の与力として、加賀小松から、９万石で村上氏が入封しました。 当時の村上城は、上杉謙信・景勝のもとで勇名をはせた本庄繁長の居城「村上ようがい」と呼ばれるものでした。この頃の様子を絵図からうかがうと、まだ石垣などはなく、建物の周囲に柵を巡らし、山の麓には領主の館と思われる屋敷などいくつかの建物がみられる程度でした。 村上の城主となった村上頼勝は、この中世城郭的性格を残す村上ようがいに、石垣や櫓を築き堀を巡らして近世城郭へと改造しました。また、家臣の居住場所や屋敷を定め、町人町などを整備し、村上の近世城下町として基礎をつくりました。やがて頼勝は隠居し、養子の忠勝がその跡を継ぎました。 しかし、時代は豊臣から徳川へと政権が移行し、幕府は自らの政権強化のため、とりわけ外様大名の取り潰しを頻繁に行いました。越後では堀秀治、松平忠輝が領地没収となりました。忠勝も家老間の争いの責任を問われ、元和４年（１６１８）に領地を没収され、丹波篠山に配流となりました。そして、元和９年９月、２５歳という若さでかの地においてその生涯を終えました。
堀直竒と城下普請	堀氏は秀吉系列であったが、直竒は関ヶ原の戦いでは家康に与し越後の上杉遺民一揆に手柄をたてた。外様大名の中では家康に信頼されたが、世継ぎに恵まれず廃絶となる。直竒といえども幕府の外様政策の例外ではなかったのである。
上杉遺民一揆 武断政治 堀家文書 縄張り 徳川秀忠 徳川家光 武家諸法度 島原の乱 慶安の変	１６１８年、元和４年、村上氏の後に越後長岡から堀直竒が１０万石で城主となります。直竒は、村上氏が整備した城郭や城下町に対して、さらに大規模な普請を行ったことが、堀家文書によって知ることができます。また、この堀家文書には、江戸にいた直竒が、国元の村上で、城下普請の総監督をつとめていた家老の堀主膳との間に交わした文書も多く残されており、築城や城下の縄張りなどに対して、直竒が事細かに指示をしていることがわかります。長岡や新潟でもまちづくりと都市計画の才能と手腕を発揮した直竒の一面をうかがい知ることができます。 こうした城下町の普請工事には近郷の農民の人たちがあてられたと思いますが、城下の町人のなかでは、築城に際して肴町が町内あげて工事に加わったようです。それによって城下における魚の専売権を許可され、肴町という町名もそのとき頂戴したと伝えられています。 しかし、寛永１５年、１６３８年、すでに家督を継いでいた長男直次が、２５歳の若さで江戸藩邸において没し、その翌年、直竒もこの世を去りました。さらに寛永１９年には後に残された孫の千助、後の直定も、わずか７歳で没し、数々の武勲と栄光に輝いた堀家も、所領を没収され断絶となりました。 しかし、この堀直竒の系統は、すでに分家として独立していた越後村松藩３万石として明治維新まで続くことになります。この直竒が計画し実施した、村上城下の大規模な普請工事により、初めて本丸曲輪・二の丸曲輪・三の丸曲輪・新町曲輪の四曲輪を中心とした城郭に整備され、町人町の形態も整いました。この城下の構成が村上の基本形として、その後の村上城下の拡大、縮小を経ながら、現代まで受け継がれていくことになります。
関ヶ原の戦いを契機に天下の実権は豊臣から徳川へ。慶長・元和から寛永時代にかけて、幕府はその権力を確立していくためにも、ある程度戦国的な武断政治を行なう必要があつた。特に、豊臣氏恩顧の大名を抑制・統制していくため、頻繁に外様大名の配置替えや廃絶・改易を行なったが、その政策は外様に限らず、親藩や譜代の大名であっても例外ではなかった。村上氏や堀氏が廃絶となったのも、この時代を象徴するものであった。	

松平直矩と天守閣の建替え	三代将軍家光のもと幕府政権が固まりつつあった頃であり、村上藩は庄内藩とともに、秋田の佐竹氏や米沢上杉氏など東国の豊臣系列の大名に対する要衝でもあった。さしずめ姫路の前に村上で修行せよということか。

御三家

（御三卿）

御家門

親　藩

譜　代

松平大和守日記

１５万石領
　北は山北から南は寺泊まで
　村上市・岩船郡・黒川村・中条町・加治川村・笹神村・京ヶ瀬村・安田・村松町・五泉市・燕市・三条市・三島郡にわたる地域に領地を有する。

　堀氏の後の村上は幕府領となりますが、正保元年、１６４４年に、遠州掛川、いまの静岡県掛川市から本多氏が１０万石で村上の新しい城主となります。この本多氏が幕府に提出したのが正保城下絵図といわれるもので、そこに前領主の堀氏が築いた天守閣が描かれています。

　その後の村上城主となるのが松平直矩です。直矩の祖父は徳川家康の第二子結城秀康で、父直基は秀康の第５子です。その血筋からいえば、生まれながらの貴公子ともいえます。直矩の父直基は出羽山形から姫路１５万石の城主となりましたが、その姫路城に入ることなく慶安元年、１６４８年、８月に江戸藩邸で没しました。幕府にとって姫路は外様大名の多い西国の要衝であることから、幼年の藤松、後の直矩では荷が重いとして、翌年に本領１５万石のまま村上城に移しました。

　１５万石の城下町となった村上では、家臣の増加により居住地の拡張と武家屋敷の増加が図られました。このとき、堀片にあった町人町を現在の片町に移し、羽黒町から南町よりに駒込侍町を造成しています。またお城についても、「零落断絶」したので元のように建て直したいと、幕府に願い出て許可されています。寛文２年、１６６２年に城普請に着手し、寛文３年には三層の天守櫓が完成し、同５年には石垣の積み直しや普請が完成し、堀氏の頃とは城の姿も一変したと思われます。

　この直矩は別名「引越し大名」とも呼ばれ、北は出羽山形から南は豊後日田まで、生涯の間に８回の国替えを命じられました。そのたびに直矩はもとより、家臣も引っ越しを繰り返さなくてはなりませんでした。『私はだまって笑顔を絶やさなければいい』と、その都度国替えに付いてくる家臣を思いやったということです。そして元禄８年（１６９５）４月、５４歳で没しました。その戒名は『天祐院鉄船道駕』、船で、あるいは駕籠で、水を行き、道を行ききした大名にふさわしいものでした。

榊原氏と村上城下の繁栄	幕府政権の基礎もようやく固まり、世の中も戦国の荒々しい気風から、天下太平の世となり、豪奢・華美といった元禄文化が花咲く時代と移り行く頃である。

徳川家康四天王
　酒井忠次
　榊原康政
　本多忠勝
　伊井直政
系列は譜代の名門

榊原政倫と高田城受取り
　高田城主松平光長は、家臣の光長の後継者を巡る争いを鎮撫できなかったという理由で領地没収となった。このとき城の受取りを行なったのが時の村上藩主榊原政倫であった。
　なお、この高田事件の影響で左遷されるのが松平直矩である。

　寛文７年、１６６７年、すで２０代も半ばとなっていた松平直矩は再び姫路城主となって村上を去り、その後に村上城主となるのが榊原熊之助、後の政倫です。寛文７年５月、姫路城主であった父政房が没し、３歳の熊之助（後改め政倫）が跡を継ぎますが、松平直矩と同じく、幼年なので姫路の守りは荷が重いとして、同年６月に本領１５万石のまま村上城に移されました。天和３年、１６８３年２月、政倫は１９歳で没しました。政倫が危篤になると分家から養子となるのが虎之助で、後に名を勝乗と改め、さらに政辰・政邦と改めています。

　榊原氏治政の３３年間は、禄高１５万石、実高２１万石余で、当時では越後一の大藩でした。この榊原氏の家臣団は百石以上の侍だけでも３８０人、足軽８００人、中間５２５人と伝えられ、そのためか、この時代にはさらに武家地と屋敷の拡張を行いました。、町人町の人口も急激に増加し９２２３人であったといいます。この時代、城下の規模も人口も、江戸時代を通して最大となりました。
元禄２年には松尾芭蕉が「奥の細道」の途次、弟子の曽良とともにこの村上に二泊し、榊原家の家老榊原一燈公の墓、及び泰叟寺、今の浄念寺に参詣しています。その後、榊原氏は再び姫路に転封され、さらに同じ越後の高田に転封され、幕末まで高田城主として在城しました。なお、この榊原氏が入封した年には、天守櫓に雷が落ちて、天守台にあたる部分がすべて焼失したと伝えられます。松平直矩が建て直した天守櫓は、わずか４年の命だったのです。そしてこれ以後、明治８年の村上城の解体まで１０８年間、村上は天守閣のない城下町であり、それが村上のお城の風景として現代に伝えられたのです。つまり村上の人は３３０余年間という長い年月、誰も天守閣を見ることはありませんでした。

寛永から寛文期は、幕府の権威・権力が確立していく時代で、内政整備に重点が移され、御触書や田畑永代売買禁止令・分地制限令などを発布しているように、大名統制から庶民統制に力が注がれるようになった。やがて元禄時代は政治組織や領国体制も安定し「天下太平」の世の中となり、町人を中心とした元禄文化が花開く。綱吉による生類憐みの令が出されたのもこの時代である。

本多忠良と家臣の大量解雇	６代将軍家宣となり、新井白石や間部詮房などの儒者や側用人が政治の中枢に登用されるようになる頃で、政治の形態も、武断政治から文治政治へと移り、武士の暮らしも大きく変化してくる頃である。
榊原家生類憐みの令下の転封 飼い犬 176 匹 大犬 151 匹：1日1匹につき、玄米2合、４７１７日分 小犬 25 匹: 1 合、887 日分 扶持米合計 13 石 3 斗 2 升 1 合 （当時７人家族の年間総生活費は約 18 石程度） 本多家嫡流 本多忠勝－忠政－政朝－政勝－政長－忠国－忠孝－忠隆	宝永元年、１７０４年、姫路１５万石城主本多忠国が没し、跡を継いだ吉十郎忠孝は７歳であるということから、同年本領のまま村上に移されます。ところが吉十郎は村上に入封することなく、宝永６年９月、江戸藩邸において１２歳で没します。この吉十郎は若年のため養子を立てる手続きがとれなかったのでしょうか、一旦は領地を没収されました。 しかし、幕府は徳川四天王の一人本多忠勝の嫡流という家柄から、分家の長男忠隆に家を継がせ、吉十郎の遺領のうち５万石と村上城を分け与え家名の存続を図りました。しかし、１５万石から５万石に減じたのですから、当然多くの家臣を解雇しなければなりませんでした。その数、新参の侍１３０人、徒歩侍８６人、村上で召し抱えられた足軽２１４人、合計４３０人という大量解雇を断行したことになります。（百石取りの侍には15 両の退職金が支払われた） 現代風にいえばリストラの嵐が吹き荒れた、ということになるのでしょうが、残ることのできた人、再就職できた人、浪人した人、百姓や町人となった人など、悲喜こもごもの人生模様が展開されたのではないでしょうか。昔も今も、リストラの対象となるサラリーマンの悲哀に、どこか通じるものがあるようにも思えます。 いずれにしても時節は１２月、村上から離れなければならない者も数多くいたことから、翌年の３月から４月までは村上に滞留することが許されたそうです。 また、そうこうするうちに、忠隆、改め忠良も翌年には三河、現在の愛知県刈谷に転封となります。その後、武蔵古河に転封しますが、将軍家宣・家継のもとで権勢を振るった間部詮房とともに将軍の側近として仕えます。さらに、八代将軍に紀州から徳川吉宗が迎えられると、詮房は高崎から村上に転封され、権力の中枢からも遠ざかることになりますが、忠良はその後も幕府の中枢に止まり、享保１９年から１２年間も老中職にあり、宝暦元年、１７５１年7月、６２歳で没しました。
松平輝貞と武家地の売却	すでに流通経済の中心は貨幣となり、商人階層の力が台頭してきた。その反面、収入の基本を米とする藩や武士の生活は次第に苦しいものとなってきたのがこの頃である。
武家地の変化 本多忠孝のとき合計 430 人解雇 江戸詰侍３割 国元約 300 人 ＝徒士長屋や足軽長屋はがら空き状態となる。 ＝松平輝貞のときに武家地の返却または売却へ	本多忠良の後、村上城主となったのが三代将軍家光のもとで知恵伊豆と称された松平伊豆守信綱の孫松平輝貞です。この輝貞は、元禄元年に小姓として江戸城に出仕すると、翌年からは五代将軍綱吉の側近として仕え、やがて壬生城主となり、さらには高崎城主となりました。これは将軍綱吉の信任が厚かったためです。その綱吉が没っし家宣が六代将軍となると、輝貞は、綱吉の側用人として権勢を誇った柳沢吉保とともに幕府の中枢から遠ざけられ、翌年には本領７万２千石のまま高崎から村上へ転封となりました。村上は１５万石から５万石に減じ、輝貞で若干増加したとしても、家臣の数は大巾に減少し、武家屋敷にも空家が多くなりました。中でも松平直矩の時代にできた駒込屋敷はガラアキになったといいます。そこで、この駒込屋敷の畑地から町人に売却されます。次に片平町や御徒歩町なども売却されることになりましたが、町人に入札させたところ、誰も入札するものがなく、そこで困った藩は、町人に無理に買わせたといいます。この武家地の売却代金は２４両余となり、家臣の屋敷の修繕料として分配されたといいます。なおこうした売却された武家地の跡にはお茶の苗が植えられ、茶畑に転じていきました。それまで、城下町としての規模を時代とともに拡張してきた村上城下も、このときを境に、次第に規模が縮小されていくこととなります。 享保元年４月、将軍家継は八歳で没し吉宗が八代将軍となると、側近として仕えた間部詮房は退き、翌年には村上城に転封を命じられます。是が非でも高崎城主に返り咲きたいと、それまでの縁故を通じて幕閣や大奥に運動していた輝貞は、間部詮房に代り、旧領の高崎に再び戻ることになります。その後、享保１５年には老中格となり、１５年余もその職にありました。享年８３歳でした。
綱吉・家宣・家継の時代は、それまでの老中を中心とした政治体制から、側用人や儒者が政治の実権を握り、武断政治から文治政治へと移行し、武士の役割も次第に事務官僚的なものとなった。また本多家の例のように大名政策も緩和されてきた。その反面、幕府・藩ともに恒常的な財政難に陥っていた。	

間部詮房の頃の村上城下	吉宗が八代将軍となると、悪化した財政状態や弛緩した政治組織を改革しようとした。再び武断政治への復帰もうたったが、経済政策には現実主義的な政策を打ち出した。（＝享保の改革）
当り目に祟り目 梅雨どきの6月３日に入場したが、２０日の夜から大雨となった。 ①本丸の門や櫓の石垣の崩壊 ②御殿の壁落剥、軒先落下 ③空き家武家屋敷の雨漏り、壁の落剥、畳の腐れ ④空屋敷からの建具や畳の盗難 ⑤堤防決壊と塩町・加賀町の被害 ⑥９月領内全域に洪水と飢饉 ⑦翌年１月大雪による家屋の倒壊 ⑧同年５月落雷による鐘櫓の焼失	松平輝貞と交替して村上城主となるのが間部詮房で、５万石で転封を命じられます。間部家の高崎からの引越に際しては、武士には手当金が支給され、足軽でも引越を願い出た者には手当金が渡されましたが、人柄のよくない者は引越を許可しなかったようです。また高崎城の本丸などについても雨漏りのしない程度に修理したといいます。また、引越先の村上城に米が無い、ということから、５千俵を用意させたり、当座の家臣の給金として２千両を用意しています。ここに村上までの旅費などを合計すると７千両にもなりますが、こうした領地替えともなると、参勤交替以上に大名の経済状態を苦しめたといわれます。 また松平家と間部家の交替に際しては、城請取り方の間部家は、肴町の枡形から小国町・寺町を通り追手門に入り、松平家は城を引渡すと飯野門から出て、山居町を通り高崎へ向かったと伝えられています。つまり、双方の行列がかち合わないように配慮してのことかと思います。 この頃の村上城下を示した絵図に「享保二年の城下絵図」がありますが、駒込屋敷はすべて取り払われ、与力町から片町南裏、現在の杉原地区にあった与力屋敷もことごとく空地となり、現在の石原にあった小役人屋敷も空家となっています。 また、お城山の裏手の防御として配置された田口屋敷もすべて取払われています。これらはいうまでもなく、家臣の減少に伴うものではありますが、この頃になると、 武力を必要とする時代ではなく、むしろ藩財政の窮乏から多くの家臣を抱えられなくなってきたことによるものと思われます。 この間部氏が鯖江に転封され、その後を内藤氏が明治維新まで引き継ぐことになすますが、この間部氏と内藤氏の城下の規模は、およそ堀氏が形づくった城下とほぼ同じくらいのものとなります。幾度かの拡張と縮小を経て、百年の後、村上城下は元の基本形に戻ったともいえます。
内藤家の出自と歴代藩主	それまで幾度となく藩主の交替のあった村上藩は、この内藤氏の入封以降、明治維新まで内藤氏の城下町として続く、現在、村上に残る城下町の歴史的遺産はほぼこの内藤氏の時代に形成された。
初代内藤信成 二代内藤信正 家康の大番頭・近習―関ヶ原伊豆韮山城主―冬の陣・長浜城守備―夏の陣・尼崎城張番―初代大阪城代となる。 五代内藤弐信 正徳二年（1712） 大坂城代を拝命 享保３年吉宗に拝謁した際に、吉宗より大阪城の構えについて質問されたが、弐信は的確に答えることができなかったゆえをもって大阪城代を罷免された。	享保３年、大坂城代を免職となった内藤弐信は、移封される城地のないまま、大坂の近郊に仮住まいを余儀なくされていました。そこへ偶然にも間部詮房が病死したので、幕府は間部家を鯖江へ追いやり、享保６年、そのあとに内藤家を村上城主としたわけです。 内藤氏の祖となる信成は、徳川家康の異母弟といわれ、一旦は内藤家の跡継ぎとなりますが、その後に嫡男が誕生したので分家したと伝えられています。慶長から元和にかけて、豊臣氏から徳川氏へ政権が移行する動乱の時期に、駿府城代、近江長浜や摂津高槻城主、さらに伏見城代や大坂城代を勤めていますが、異母兄家康の信頼も厚かったことと思われます。その信成から五代目が村上城主となった弐信というわけです。その後、代は変わり九代、約１５０年間、村上は、内藤氏の城下町として明治維新まで続いていくことになります。 村上城についても、内藤氏は前時代のものを引継ぎ管理し、石垣の補修や建物の修理をしただけで、特に新築などはしなかったようです。そのため城内の建物も火災や天災のたびに減少していきました。また、かって肴町の枡形付近にあった上級武士の下屋敷や現在の大欠のあたりにあった下級武士の屋敷地も、町家や畑地に変わりました。 この頃の村上城下は、最大に拡張する榊原氏とは比較にならないほどで、堀氏よりも縮小しました。しかし、その規模は小さくなったとはいえ、それなりに安定し、町方は繁栄した時期でもあったといえます。ところで、この頃も、当然村上城に天守櫓は無かったわけです。つまり天守櫓のない風景は、この内藤氏時代でも当たり前の風景であったのではないでしょうか。
家宣の側用人から大名へ出世した新参大名詮房、それに反発する先祖の功績や家名に頼る大名との間の確執は大きかった。村上藩における松平輝貞―間部詮房―内藤弐信の藩主交替もまさにそれであった。同じ５万石でも間部家が転封された鯖江は当時、城もないひなびたところであつたという。	

6代 **内藤信輝**	実は内藤家４代藩主信良三男。弐信は養父信良の存命中に信輝を嗣子と定めていた。享保10年、43歳で家督を継ぎ、紀伊守に任じられる。同年初入部し羽黒神社の祭礼を居城の月見櫓で見物した。同年夏場から病気となり、村上城中で歿する。
7代 **内藤信興**	信輝二男。享保10年、３歳で家督を継ぐ。元文元年紀伊守に任じられる。宝暦11年、42歳で家督を信旭にゆずり隠居する。安永９年(1780)、62歳で江戸にて歿する。
8代 **内藤信旭**	信興長男。宝暦８年豊前守に任じられ、宝暦11年、18歳で家督を継ぐ。同年初入部したが、大雨のため行列は岩船～瀬波～肴町に入る旧例を破り、七湊～山居前から羽黒町に入った。同12年参勤交代で江戸へ出発した信旭は、津川で病気になり会津坂下で死去した。
9代 **内藤信凭**	信興二男。兄信旭が江戸への旅中に発病重態ということから信旭の養子となる。宝暦12年、15歳で家督を継ぎ、明和元年(1764)紀伊守に任じられる。安永４年、将軍家治の日光社参に勤番を命じられたことから、領内に１万両の御用金を課している。安永10年没、34歳。
10代 **内藤信敦**	信凭嫡男。安永10年、５歳で家督を継ぎ、寛政６年豊前守、同14年紀伊守に任じられる。奏者番―寺社奉行―若年寄を経て、文政５年（1822）京都所司代に任じられる。修学院離宮の修理を命じられ、領内に２万両の御用金を課した。また自ら学問を好み書を能くしたが、藩士の子弟の教育にも意を注いだ。文政８年、京都にて、48歳で歿する。
11代 **内藤信親**	信敦三男。次兄は夭折。長兄信方（21歳）は文政５年に病没。文政８年、14歳で家督を継ぎ、同９年紀伊守に任じられる。父信敦と同じく奏者番―寺社奉行を経て、嘉永３年、京都所司代に任じられ、宮中の内侍所の修復に力を注いだ。同４年、老中に列せられ、文久２年まで務める。元治元年、致仕して家督を信民に譲り、藤翁と号して隠居する。
12代 **内藤信民**	信親養子（信州岩村田藩内藤家より）。元治元年、14歳で家督を継ぎ、豊前守に任じられる。慶応４年、藩士の懇望により村上に帰城するが、隠居藤翁から諭された官軍への恭順を果たし得なかった懊悩の末、城中で自殺してしまう。19歳であった。
13代 **内藤信美**	信親養子（岸和田岡部家より）。明治２年に家督相続を認められ、旧領５万90石８斗８升を賜り、豊前守に任じられた。同年版籍を奉還し、改めて村上藩知事に任ぜられた。同４年廃藩置県により村上藩は廃止されて村上県となり、信美は官を解かれた。

二つの役場、二つの学校	村上に限らず、城下町であったところでは、武士と町人が別々の町をつくるということは珍しいことではなかった。しかし、村上のように昭和21年まで、２つの町が存続したということが、全国的に希有なものである。

①村上町は、商工業という生産・流通・消費という形態を有する町
②村上本町は、士族という消費階級を主体とする町
③村上本町の財政を支えたのは鮭の収益と山林収益であった
④鮭の漁獲高減少による収益の低下は、直接町財政を圧迫することになった

村上城は、明治元年の戦いでお城山の麓の居館は焼失しましたが、櫓や門、塀などはそのままでした。しかし、このような城郭は無用の長物であり、その修理に巨費を投ずるのは無益であるとして、時の明治政府に村上城解体を願い出たのです。
そして明治８年から９年にかけてすべてが取り壊され、あるいは道路に、あるいは宅地に変わりました。

城下町の象徴であった城の役目は終わったのです。それは同時に武家社会の崩壊であり新たな門出を意味していたはずです。しかし藩政時代の階級意識を引継ぐように、村上は一つの町とはならず、村上本町は士族の町、村上町は町人の町というように、士族と町人とが別々の自治体をつくることになりました。明治維新以後、階級意識から城下町が二つに分裂した例は珍しくありませんが、村上のように、昭和２１年に至るまで分裂していたという例は、全国的にも珍しいといえます。

その間も、階級意識は色濃く残り、役場も学校も二つという形態をとり続けました。特に塀を隔てて接していた二つの学校では、子供たちにもこうした階級意識は波及し、「本町学校ジャンジャン学校」・「町学校のクッサレ学校」と、時には石を投げ合うという風景が戦後まで続きました。

こうした村上の様子について、すでに明治５年に、時の新潟県令が大隈重信に宛てた書簡に、「新発田、村上は旧弊が甚だしく、事務がまとまらず誠に困っている。それに引換え村松、長岡は公平の活論があって事務が進んでいる」と書き送っています。現代からすれば、なぜ、そこまで階級意識にこだわるのかということになるのかもしれませんが、村上の場合には、それが時代をこえて、今でも人々の意識の中に生き続けているようなところがあります。それもまた城下町の遺産として生かしていくことを考えることこそ大切な気がします。

近世以降村上藩関連歴史年表

西暦	和暦	将軍	村上藩主	重要歴史的事項その他	村上関連事項
1598	慶長　3		村上頼勝		
1600	5			関ヶ原の戦い	
1603	8	家康		徳川家康征夷大将軍となる	
1609	14	秀忠			
1614	19			大阪冬の陣	
1615	元和　1		村上忠勝	大阪夏の陣・武家諸法度、公家諸法度等発布	
1618	4		堀　直竒		村上忠勝改易、長岡より堀直竒入封
1619	5			福島正則改易	藩から鮭子捕獲禁止の制札が出る
1620	6				徳光屋覚左衛門茶を植える
1623	9	家光		家光将軍となる・松平忠直改易	
1632	寛永　9			加藤忠広改易・大目付設置	
1633	10			若年寄設置	羽黒神社遷宮（村上大祭のはじめ）
1635	12			鎖国令・参勤交代制・寛永武家諸法度・寺社奉行設置	
1637	14		堀　直次	島原の乱おこる	
1638	15			大老を設置	直次歿し家督を直定が継ぐ。
1639	16		堀　直定		直竒歿す。
1642	19				直定歿し除封となり、村上藩は一時幕府領となる
1644	正保　1		本多忠義		遠州掛川から本多忠義入封
1649	慶安　2		松平直矩		播州姫路より入封・三条など村上藩領となる
1651	4	家綱		家光歿し、家綱四代将軍となる。慶安の変おこる	
1665	寛文　5				天守三層櫓できる
1667	7		榊原政倫		播州姫路より入封・天守三層櫓落雷により焼失
1668	8				飯野侍屋敷 92 軒焼失
1680	延宝　8	綱吉		家綱歿し綱吉五代将軍となる	
1683	天和　3		榊原勝乗		
1687	貞享　4			生類憐みの令を出す	
1688	元禄　1			柳沢吉保側用人となる	
1689	2				芭蕉村上に二泊する
1690	3				羽黒神社神明宮建立される
1694	7			柳沢吉保老中格となる	
1700	13				岩船大橋できる
1702	15			赤穂浪士の討ち入り	
1704	宝永　1		本多忠孝		播州姫路より入封
1709	6	家宣	本多忠隆	綱吉歿し、家宣六代将軍となり、新井白石登用	
1710	7		松平輝貞	間部詮房高崎藩主に転封	輝貞高崎より村上藩主に転封
1712	正徳　2			内藤弐信大阪城代となる	
1715	5	家継		家宣歿し家継七代将軍となる	
1716	享保　1			家継歿し吉宗八代将軍となる。享保の改革始まる	
1717	2	吉宗	間部詮房	間部詮房村上藩主に転封	松平輝貞高崎藩主に転封
1718	3			内藤弐信大阪城代を罷免される	
1720	5		間部詮言 内藤弐信	詮房村上にて没する。弟詮言跡を継ぐが、詮言を鯖江藩主に転封。 同年、大阪で待機中の内藤弐信を村上藩主に転封する。	
1721	6			株仲間公認	久保田町より出火 120 軒焼失。久保多町と改める。
1723	8			足高の制を定める	
1725	10		内藤信輝		弐信隠居し信輝に家督をゆずる
1728	13		内藤信興	江戸火消いろは 45 組を定める	
1738	元文　3				鮭不漁のため鮭漁停止される
1742	寛保　2				岩船町大火 873 軒焼失
1745	延享　2	家重		吉宗将軍職を家重にゆずる	

1746	3				塩谷騒動起こる
1760	宝暦 10	家治	内藤信旭	家重将軍職を家治にゆずる	九品仏建つ・肴町屋台造られる
1762	12		内藤信凭		
1767	明和 4			田沼意次側用人となる	岩船林泉寺より出火 370 軒焼失
1770	7				瀬波町大火、全町焼失
1772	安永 1			田沼意次老中となる	
1773	2				村上片町より出火 174 軒焼失
1774	3			解体新書が出版される	
1777	6				岩船大火 700 軒・瀬波浜町 80 軒焼失
1781	天明 1		内藤信敦		
1786	6	家斉		家治歿し家斉将軍となる。田沼意次失脚	
1787	7			松平定信老中となり、寛政の改革をすすめる	
1793	寛政 5			松平定信老中を辞す	
1794	6				種川の制を定める
1800	12			信敦・奏者番に任じられる	
1813	文化 10			信敦・寺社奉行に任じられる	
1816	13				小田伝右エ門西陣の職人を招き袴地の織り方を習う
1817	14			信敦・若年寄に任じられる	
1822	文政 5			信敦・京都所司代に任じられ、将軍家斉より修学院離宮の修営にあたる	
1825	8		内藤信親	信敦京都で歿し、信親家督を継ぐ	
1831	天保 2				山辺里織を江戸に売り出す
1834	5			水野忠邦老中となる	
1836	7			信親・奏者番に任じられる	
1837	8	家慶		家斉将軍職を家慶にゆずる	
1843	14			信親・寺社奉行に任じられる	
1849	嘉永 2				藤基神社が建立される
1850	3			信親・京都所司代に任じられる	藤井邸建築される
1851	4			信親・老中に列せられる	
1853	6	家定		ペリーが浦賀に来航する	滝波重平・宇治茶の製法を導入する
1854	安政 1			ペリー再来航し、日米和親条約を結ぶ	
1856	3			ハリスが下田に来る	
1858	5	家茂		伊井直弼大老となり、日米修好通商条約を結ぶ	岩間邸大改造する
1859	6			一橋慶喜・徳川斉昭など謹慎を命じられる。橋本左内・吉田松陰ら処刑。	
1860	万延 1			桜田門外で伊井直弼暗殺される	藩医稲葉友賢、種痘を行なう
1861	文久 1			皇女和宮、将軍家茂に降嫁	信親、名を信思と改める
1863	3			薩英戦争	
1864	元治 1		内藤信民	禁門の変・長州征討・四カ国連合艦隊の下関占領	信親隠居し藤翁と号する
1866	慶応 2	慶喜		家茂歿する。薩長討幕同盟を結ぶ	
1867	3			明治天皇即位・慶喜大政奉還する・王政復古の大号令下す	
1868	明治 1			戊辰戦争おこる	村上藩奥羽越列藩同盟に加入
1869	2		内藤信美	藩籍奉還が行なわれる	信美・藩籍を奉還する
1871	4			廃藩置県が行なわれる	村上藩から村上県となる